

【小説】笑うヤカン

story works by warau yakan illustration works by shindou arata

【イラスト】新堂アヲタ

6

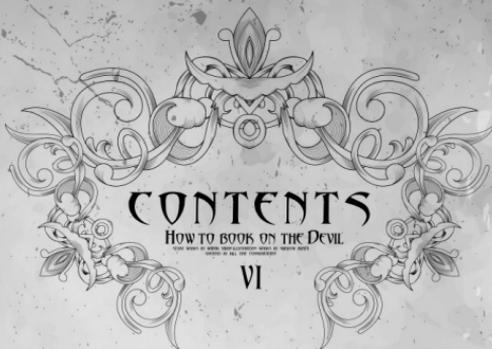
魔
鬼
王
の

始
め
の

試し読み版

CHARACTERS

[魔王]
オウル[サキバズ]
リル[英雄]
ユニス[魔女]
スピナ[迷宮の少女]
マリィ[商人]
ノーム[黒アールヴ]
エレン[白アールヴ]
セレス[魔物使]
ミオ[魔術師]
ウイキア[剣士]
ナジャ[僧侶]
シャル[巫女]
ユヅ[大巫女]
テナ[海の魔王]
タツキ[宰相]
メリザンド[レザードデーモン]
ロトガン[英雄王]
ウオルフ[鎧の英雄]
ザイトリード[氷の女王]
ザナ[忍びの者]
ホスセリ[火山の神]
サクヤ[塞の神]
ミシヤ[目の巫女]
イェルダヴ[探検者]
サリハ[ダンジョンの神]
ソフィア



CONTENTS

HOW TO BOOK ON THE DEVIL

VI

Step. 12	戦後処理を片付けましょう	6
Step. 13	愛されるダンジョンを作りましょう	49
「寄り添って」 話	相応しき名を与えましょう	102
Step. 14	臆病者を焚き付けましょう	116
Step. 15	不滅の勇者を斃 <small>たお</small> しましょう	183
Step. 16	愚かしい決断を選び取りましょう	323
あとがき		336
「魔王の始め方オンライン」シリアルコード		101

Step.12 戦後処理を片付けましょう

1

魔王オウルが作り上げ、その娘であるとともにダンジョンの神でもある少女、ソフィアが管理する広大な地下迷宮の最深部。魔王本人の部屋よりも更に厳重に守られた場所に、それはあった。

それは外部からの攻撃への備えであると同時に、内部からの脱出への備えでもある。品の良い調度品が飾られ、使い心地の良い家具が揃えられ、扉には鍵すらなく。

それでもそこは、ある種の牢獄であった。

「入るぞ」

オウルはその部屋を訪れ、几帳面に三度ノックする。

「あ、オウル、いらつしやーい」

『はい、お入り下さい、陛下』

扉を開けると、そこには女が一人。しかし二つの同じ声がオウルを出迎えた。

「何か不都合はないか？」

『いいえ。とても……よく、して頂いておりますから』

褐色の肌に、紫の髪の少女。イエルダーヴは、口を動かさぬままにそう答える。

「なんとかなりそう？」

彼女の口を動かしてそう尋ねるのは、イエルダーヴの身体を操るリルだ。

「いや……悪いが、もう少しかかりそうだ」

砂の国の王ウセルマートの持っていた支配の杖。その中に封じ込められたイエルダーヴの魂は、ザナの魂と入れ替わりに元々の肉体に戻っていった。しかしその首に嵌められた服従の首輪によって再び封じられ、自由を奪われたままであった。

服従の首輪に封じられてからは何の指示も与えられていないせいかわウルたちに襲い掛かるようなことはなかったが、そのままでは行動どころか食事や排泄すらままならない。仕方なく、リルがその身体に宿って必要最低限の生活をこなしている状態だった。

「じゃあ、わたしはちよつと休憩いつてくるから、イエルダーヴのことお願いね」

リルは突然そう言うと、イエルダーヴの身体からすると抜け出す。途端、イエルダーヴの身体は支えを失い、ぐらりと揺れた。

「おい！ ……全く、奴はどうも仕事雑でな。怪我はないか」

「はい、いえ、あの……大丈夫です」

慌ててその身体をオウルが支える間に、リルは部屋を出て行ってしまふ。オウルが服従の首輪に追加した発声機能のお陰でなんとか意思の疎通だけは取れるが、それ以外は人形のようなものだ。厄介なことに今のイエルダーヴはウセルマートの命令がなければ、自分で立っていることさえできなかつた。

『お聞きして、よろしいでしょうか……』

オウルがその身体をベッドの上に寝かせてやると、イエルダーヴはおずおずとした様子でそう切り出した。

「なんだ？」

『何故陛下は……わたしに、このように良くして下さるのですか？』

自分の意思で指一つ動かせぬ女に部屋を与え、部下に甲斐甲斐しく世話をさせ、暇な身分でもなかろうにこうして度々訪れては何か困っていることがないか尋ねる。

イエルダーヴの力を利用するのが目的だとしても、あまりに丁重な扱いだつた。

「何故だと？」

オウルにしてみれば思っても見ないことを問われ、返答に詰まる。言われてみれば、これほどに世話を焼く理由もなかつた。

ザナの妹だから。美しい女だから。そういった理由がないわけではない。

「そうだな。強いて言えば——同情か」

だが改めてよくよく考えてみれば、一番の理由はそれだった。

「己の意思さえ奪われ、選択の余地もなく無理やり従わされるのは辛かろう」

それはかつてオウル自身が受けた、もつとも苦しい過去の記憶。同じ目に、それも何年もあつてきた彼女に対する憐憫の思いが強くあつた。

「……やっぱり……」

オウルの言葉に、イエルダーヴは小さくそう呟く。

「陛下。不躑ぶしつけながら、一つだけ、お願いをしてもよろしいでしょうか」

「なんだ？ 必要なものがあるなら、一つと限らずともある程度は便宜してやるぞ」

「いいえ……」

振れぬ首の代わりにイエルダーヴは答え、そこで言葉を切る。

そしてしばらくの間沈黙した後、逡巡しゅんじゆんを振り切るように声を上げた。

「わたしを……抱いては、頂けませんでしょうか」

「なんだと？」

出し抜けの要望に、オウルは眉を顰ひそめる。

「はい。わたしを助けて頂き、尽力して頂く御恩。今のこの身では、それくらいしか返す術があり

ません。このような粗末な身体で良ければ、どうか」

粗末な身体、というのは随分な謙遜であった。金の装飾で飾られた褐色の肌はその黄金に負けぬほどの輝きを放っているかのように艶めいていて、まるで芸術品のように美しい。彼女の身体を申し訳程度に覆う布を押し上げる豊満な双丘ときゅつと括くくれた腰、そして熟れた桃のような尻は男であれば誰もが手を伸ばしたくなるに違いない。

「ふむ……」

オウルはイエルダーヴのむつちりとした太腿に手を添えて、ゆつくりと撫ぜる。どこまでも柔らかく、しかしそれでいて指を押し返す張りの強さ。極上の触り心地だ。

『陛下のお好きになさって頂いて……構わないですよ』

「それは実に魅力的な提案だな」

動かぬ人形のような身体といえど、彼女にそう言われて滾たぎらぬ男はいないだろう。

本物の人形ならともかくとして、身体を動かさないだけで魂はそこにあるのだ。見聞きができていゝというところは、触れられる感触もあるということだ。

『んっ……』

ついと滑らされるオウルの指先。それはイエルダーヴの膝の辺りを軽く撫ぜただけであったが、イエルダーヴは敏感に声を漏らした。この極上の肉体をほしきままに弄もてあそび、征服し、鳴かせるのは

どれほど心地よいことだろうか。

「要らん」

『え……』

しかしきつぱりと拒否するオウルに、イエルダーヴは小さく声を漏らした。

「生憎と俺は女には困っておらんからな。わざわざ身動きもできぬ女を抱く必要はない」

それに、とオウルは鋭い視線をイエルダーヴへと向け、言った。

「抱けばお前は力を失う。……それが狙いであろう」

『ご存じ……でしたか』

イエルダーヴの問いに、オウルは頷く。

「神の中には純潔を重んじるものも多いそうだな。男神ならばなおさらだ。抱かれればお前は力を

失い、価値を失くし、これ以上利用されることもなくなる」

『……はい』

力なく返事をするイエルダーヴに、オウルは呆れたように深く息をついた。

「案ぜずとも、俺はお前を利用するつもりなどない……と言つても信用ならぬだろうがな。まあ悪いようにはせぬ。あたら純血を散らすこともあるまい」

全知の力の一端を担う彼女であれば、オウルがザナや他のものたちに行ってきた悪辣な所業も知

っているだろう。疑心暗鬼になるのは無理もないことだとは思いますが、オウルには本当に彼女を利用するようなつもりはなかった。

『そんなことは、ありません！』

だがオウルのそんな言葉に初めて、イエルダーヴは声を大きく張り上げる。

『陛下は……わたしを、助けて下さいました。そればかりか、わたしをこの首輪から解放するため自ら尽力して下さいます。そんな恩人を疑うような恥知らずではありません』

熱のこもったイエルダーヴの言葉にオウルはかえって居心地の悪い思いを感じ、額に手を当てた。「こう言ってはなんだが、お前はもののついでだ。別にお前自身を助けようと思って助けたわけではないし、首輪の解除方法を調べているのもうちの部下が巻き込まれたからだ。俺が自ら作業にあたっていても、俺以外にそれができるものがないからにすぎん」

『はい。それは勿論、わかっています』

あのザナの妹にしては随分と義理堅い奴だ、とオウルは思う。魂を直接響かせるその装置では、肉体を持っている時のように虚言を弄することはできない。思っていることがそのまま出力されるからだ。

つまりはザナのように猫を被っているわけではなく、真実彼女はオウルに感謝しているということだ。

『ですから、これは、運命だと思うのです』

「運命だと？」

表情を歪め、オウルはオウム返しに言葉を返す。

それは正直嫌いな言葉であった。天の定めた進むべき道など、反吐へどが出る。

『はい。空に座す太陽の神すら見通せぬ、埒外らちがいの出来事。望むべくもなく、与えられるべくもない僥倖ごうこう。わたしがいくら願い祈つても、天は助けてなどくれなかった』

だが。

『——ですから、陛下。あなたが、あなたこそがわたしの運命。望むと望まざるとに拘かかわらず、わたしの行く末を決めて下さった方なのです』

声を震わせ語られるイエルダーヴの言葉は、オウルが思ったそれとは真逆の意味が込められていた。

『ですからわたしはこの身を……神ではなく、あなたに捧げたいのです』

魂は嘘をつけない。力を失いたいという思いはあったにせよ、恩を返すために身を尽くしたいというその思い自体には一切の虚飾はなく、イエルダーヴの本心であったのだ。

「わかった。そうまで言うなら、抱いてやる。だが肉体の自由を取り戻した後でも遅くはあるまい。もうしばし待て」

『それは……このままでは、いけないのですか？』

存外食い下がつてくるイエルダーヴ。

「物のように扱われ、人形を犯すように純潔を失いたいというのなら構わんが。お前はそういった性癖を持つているのか？」

『いいえ、そういうわけでは、ありませんが……』

「ならばもうしばし待て」

オウルの言葉にイエルダーヴは押し黙るが、あまり納得がいかないようでもあった。肉体の制御を失い表情や身体はピクリとも動かないのに、そんな雰囲気は漂うというのも奇妙な話だ、とオウルは思う。

『……では、別にもう一つ、お願いしてもよろしいでしょうか？』

しばしの沈黙の後、おずおずとイエルダーヴはそんなことを言い出した。

2

「ついたぞ」

『ご面倒をおかけします』

イエルダーヴの身体を横抱きにして、オウルがやってきたのは浴場であった。

火山を丸々取り込んだソフィアのダンジョンの中には、大小様々な浴室がある。

彼らがやってきたのはその中でも比較的小ぶりな一室だ。

身体を洗って欲しい。それが、イエルダーヴの告げた望みであった。

無論、わざわざ魔王にさせるようなことではない。侍女でもリルにでも頼めばいいことではある。

つまりそれは、露骨な誘惑だ。何をそんなに焦っているのやら、とオウルは内心嘆息した。

「一体何を企んでいる？」

「……言えません」

尋ねれば、素直にそう返ってくる。魂から直接発せられる言葉は、嘘を言うことはできなくとも黙っていることはできるのだ。

「まあ良い。俺を害するような理由ではないのだろうか」

『はい。それは勿論です』

そうとだけ言質が取ればいい。彼女が文字通り手も足も出ないのは確かなことなのだ。オウルに何かを能動的に仕掛けられるような状態であれば、こんなに苦勞はしていない。

「ならばいい。脱がすぞ」

脱がすと言つても、イエルダーヴが身に纏うそれは殆ど服の用を成してはいなかった。リルが普

段着ている服よりも身体を覆う面積が小さく、扇情的だ。そのくせ、面紗めんしやで顔の半分は覆われて見えないのがかえって蠱惑こわくてま的であつた。

それを取り払つて現れた顔立ちは、存外に若い。いつそ幼いと言つてしまつてもいいかもしれないくらいだ。ふわふわとウェーブした紫色の髪に、宝玉のように澄んだ紫の瞳。どこか儂はかげな美しさを持つ姉デズとは違つて、柔らかな愛らしさがあつた。

しかし下には、あどけない顔立ちに不釣り合いな二つの膨らみが強烈に己の存在を主張している。そこを覆う布は肩と首にかかつた金枠からまるでカーテンのように垂れ下がっているだけで、めくり上げればすぐに褐色の双丘と、恥ずかしげにその頂点を彩る薄桃色の蕾が丸見えになつてしまつた。

「いい趣味をしているな」

『王の……ウセルマートの趣味です……』

オウルの皮肉に、イエルダーヴは消え入りそうな声で答える。自らの意思を全て封じられていたのだ、本人の趣味でないことは明白だつた。

「これはどう……ああ、ここか」

服と呼んでいいのか判断に悩むその金具を、オウルは一つ一つ外していく。そして最後に腰を覆う小さな布を取り去れば、イエルダーヴは一糸纏まとわぬ生まれたままの姿となつた。



その美しさ、悩ましさと云つたら。小柄な身体つきとあどけない顔立ちは否が応でも庇護欲をそるような幼げなようでありながら、胸元の二つの果実ときゅつと括れた腰つき、そしてむっちりとした大きめの尻に滑らかな太腿は、これ以上ないほどに女としての色香を身に纏っている。濃い褐色の肌が、その魅力に更にエキゾチックな味わいを加えていた。

男ならば、誰もがむしゃぶりつかずにはいられないであろう、その肢体。もし興味を持たない男がいるならば、それは同性愛者か幼児性愛者くらいのものだ。

『いかが……で』

自身もそれを知りながら、控えめな声色で尋ねるイエルダーヴ。その頭に、オウルは桶で掬った湯を思い切りぶちまけた。

途端 ふわふわの彼女の髪の毛は顔に張り付いて、見る影もなくなってしまう。

『な、何を……』

オウルが指を振ると、石鹸や洗い布が浮遊してイエルダーヴの身体をあつという間に泡だらけにし、磨き上げていく。そして再び湯をざざりとかけられすっかり垢を落とされると、浴槽に叩き込まれた。

『酷いです、こんな、こんな……』

「洗って欲しいと言ったのはお前であろうが」

確かにそうは言った。言ったが、このような扱いを求めていることではない、とイエルダーヴは思う。なんともいうかもっと、色めいた雰囲気をも求めているのだ。断じてこんな、犬猫を洗うような……下手をすれば衣服を洗うかのような雑な扱いを望んでのことではない。そもそも、オウル自身は服を脱いでさえいなかった。

『そんなに……わたしには魅力がありませんか……』

「別に、そういうわけではないが」

むしろ、真逆だ。流石さすがに欲望に負けて襲ってしまうというほど自制心が薄いわけではないが、その身体に触れば男として欲情しないわけがない。自由を取り戻すまでは手を出さないと宣言した手前、生殺しの気持ちわざわざ味わう気にはなれないだけだった。

無論、巨大な後宮を抱える魔王には、溜まった欲求を吐き出せる相手は何十人、何百人といる。しかしイエルダーヴに対して抱いた劣情を他の女にぶつけるなどというのは、オウルのプライドが許さない。

『でしたら何故、触れても下さらないのですか……』

「言っただろう。お前が望むのなら、自由になった後でいくらでも抱いてやると」

『そのような慰めおしやを仰らないで下さい。わかっているのです。わたしが……』

震える声で、イエルダーヴは言った。

『わたしのこの身が、穢^{けが}らわしく、おぞましいものだということは……』

「何の話だ？」

またぞろ、呪いだなんだと言い出すのだろうか、とオウルは思った。ホ德里やホスセリといい、この大陸の人間はとかく面倒くさい。

『能力のために犯されこしませんでしたが……この身体に、ウセルマートが触れていない場所はありません。そのような女を、陛下のような方が好むわけありません』

だが、イエルダーヴの口から語られたそれは、面倒だと切つて捨てるには重いものだった。

「そんなことは言っておらぬ。その忌々しい首輪さえ外れてしまえば……ああ」

唐突に、オウルはそれに思い至つた。

「お前、それが外れぬと思つているのか」

オウルにとつてすればそれは、多少面倒な錠前にすぎない。下手に壊せば中身の魂ごと壊れてしまうから慎重になつてはいるが、けして解除できないような代物ではない。

けれど、イエルダーヴにとつての首輪は、長年己を縛りつけてきた絶望の象徴だ。それを外せるなど、にわかに信じられないのだろう。

『この服従の首輪は、永遠の隷属の証。魂ごと破壊する以外に外す方法はないのです』

イエルダーヴの言うことは正しい。この首輪には、外して魂を解放するための機能が一切なかつ

た。普通なら何らかの解除方法は用意しておくものだが、ないものはない。

だが、それは外せないということの意味しない。やりようはいくらでもある。そう思うのは、オウルが優れた魔術師だからだ。イエルダーヴにはその実感が無い。オウルがありもしない希望を言つて聞かせているものと感じているのだろう。

「……仕方あるまい」

そう信じ込んでいる彼女に、どれほど口で理屈を説いても無駄なことだ。態度で示す他ない。

「ならば望み通りにしてやる」

『陛下……?』

服を脱ぎ捨て、浴槽へと入ってくるオウルにイエルダーヴは怪訝な声を上げた。

「触れても構わんな?」

『それが、陛下のお望みであれば』

念のため尋ねれば、すぐさまそう返ってくる。オウルとウセルマート。やっていることにそう差はないだろうに、何故こうまで懐かれているのか、とオウルは首を捻るばかりだ。

とはいえ、本人がそう言うのならば是非もない。

オウルはイエルダーヴの背に腕を回すと、彼女を支えながらその形の良い顎を持ち上げて、まずはその艶やかな唇を奪った。

『あっ……!!』

口を塞いでも、首輪から直接出力される心の音には無関係だ。漏れ出る驚きの声には、ただオウルの行動が意外であったという以上の響きがあった。

「何だ。何かあったのか」

『いいえ、その……』

言いつらそうにイエルダーヴは答える。

『口づけをされるのは、初めてでしたので』

『……全身触れられたと言っていないかったか？』

そう答えつつも、オウルはイエルダーヴを抱きしめ、その耳元から髪、首筋、鎖骨の辺りへと丹念に口づけを落としていく。

『それは、その、そう、ですが……』

なんとなく想像はついた。オウルがウセルマートと実際に対面したのはごく僅かな時間だったが、尊大な王であったことは疑うべくもない。わざわざこんな風に女を慈しむようなことはしなかったのだろう。

「洗うぞ」

オウルは石鹸を泡立てると、自らの手にそれを盛りつけ、イエルダーヴの身体を後ろから抱きす

くめるようにして抱^かえた。その腕を伸ばしてやり、二の腕から肘、手のひらから指の間までを丁寧
に丁寧に洗い上げていく。

両腕を泡まみれにしてやって、胸元へと手を伸ばすと、その先端はピンと硬く尖っていた。身体
の制御を失っても心臓が動きを止めないように、彼女の肉体そのものはきちんと反応しているのだ。

『あ……その……』

自身もそれをわかつているのか、恥ずかしげに声を上げるイエルダーヴに答えることなく、オウ
ルは柔らかな双丘を優しい手つきで撫でた。むっちりとした乳房は触れているだけで気持ちよく、
途方もないほどに柔らかで、思わず揉みしだいてしまいたくなる。だが彼は精神力を総動員してそ
の誘惑に耐えた。柔肉を持ち上げ、その下側までも丁寧に洗い清めていく。

『あの、陛下……当たって、ます』

だが、反応する己自身までは堪^たえることができなかった。この状況で反応せねばそれは不能だ。
密着している関係上隠すこともできず、硬く反り立ったオウルの愚息がイエルダーヴの尻に当たる。

「だからどうした」

『そのまま……して下さっても』

「せんと言っただろうが」

このままイエルダーヴの腰を掴んで突き入れ、その膣内に白濁をぶちまければどれほど気持ちい

いだろうか。本人も良いと言っているのだから、もはやそうしないのはただオウルの意地でしかなかった。

胸を洗い終えて、オウルはイエルダーヴの腹から腰にかけてを撫ぜる。余分な贅肉など欠片もついていないならかな腹は、殆ど胸や尻と変わらないほどの破壊力を備えていた。きゅつと括れた腰つきも、オウルの獣欲を刺激し理性を削るには十分だ。

だが、そこから下。尻と太腿に至っては、さしもの魔王も己の選択を後悔し始めるほどの力を秘めていた。同じ生き物の肉とは思えぬ、何故形を保っているのかと疑問に思ってしまうほどの柔らかさ。

ことに内ももの触り心地ときたら、オウルでさえ思わず手を止めその感触を堪能してしまうほどであった。しかし魔王は強靱な精神力で以って一瞬で我に返り、作業的に彼女の身体を洗いきる。

「あとは……ここだな」

オウルは言つてイエルダーヴの身体を寝かせると、その脚を割り開いた。

『陛下、そこは……!』

「汚れの溜まりやすい場所だ。しっかりと清めねばな」

花卉を割り開くと、褐色の肌とは裏腹に鮮やかなピンク色の肉が覗く。その奥に、彼女の純潔の証拠までが見て取れた。オウルは躊躇ためらわず、彼女のそこに口をつける。

『いけません、そこは……汚い、穢らわしい場所です』

「だから清めるのだろう」

イエルダーヴは必死にオウルを止めようとするが、文字通り手も足も出ない。オウルは構わず、彼女の秘芯に舌を這わせた。

『あ……あ……あ……！ 駄目、です……！ そんな、陛下……！』

断続的に声を上げるイエルダーヴ。

『ああ、あああ……あ……あ……あ……！』

その声が、不意に二重に重なって聞こえた。

喘ぎ声というのは元々、意識と無意識の間にある。それは声ではあるが、快楽が身体を震わせ鳴らす音でもあった。イエルダーヴの肉体が反応し、声を上げているのだ。

なるほど、その手があったか、とオウルはあることを思いつく。

「悪いが、少し本気を出すぞ」

そう言つて、魔力を込めた指先で彼女の下腹部に紋様を描いた。それは、性感を増幅する魔術だ。

『ひ……あああ……！』

途端、イエルダーヴの腰がはねた。

魂を封じられても、イエルダーヴは周囲を見聞きし、触れられた感触を認識している。それはつ

まり、魂は完全に封じられたわけではなく、何らかの経路が肉体との間に繋がっているということだ。

「あ、や、『駄目、陛下、下あつ……！ 駄目、』ああつ、ふあああつ！ 『駄目です、もう、』あああつ！ 『だめえ、イツ……ちや、』あああ！」

イエルダーヴの魂と肉体の声がブレ始める。

外から首輪を破壊すれば、中の魂諸共に砕けてしまうだろう。

だが、中から破壊すれば？

勿論、常人の魂に物質を破壊できるほどの力は存在しない。魔術を使うためには詠唱や印……つまりは口や舌、身振り手振りが必要であつて、魂だけでは普通は使えない。

普通は、だ。

「ああああああ、あああああつ、あああああああつ！」

イエルダーヴの声が上ずり始め、魂はもはや文句を言う余裕さえ失う。

「いいぞ、イけ……っ！」

イエルダーヴの魂に繋がる経路のうち、もつともオウルの扱い慣れたもの……つまりは性感を通じて、彼は彼女の魂に魔術を使わせた。それは暗闇の中、垂らした釣り糸の先にくくりつけたペンで文字を書くようなものだ。

「あああああああああああああああああああつ!!」

だがオウルは——世界で五指に入るであろう魔力制御の名手は、それを成し遂げた。

イエルダーヴの首輪が光を放ち、パキリと音を立てて中央から両断される。オウルはすかさず、外に放たれようとする魂を彼女の胸の中に押し込めた。

「陛下、下……?」

イエルダーヴの瞳がぱちぱちと瞬き^{また}、オウルの顔を見つめる。その頬には赤みがさし、人形のようであった顔立ちに命が吹き込まれ。

そして彼女は、己の胸を鷲掴みにするようにして押し当てられた男の手を見た。

「いやあああああつ!!」

「待て、嫌とはなんだ、嫌とは」

絹を裂くような悲鳴に、オウルは澁面を作る。

「ご、ごめんなさいい、で、でも、こんな、は、恥ずかしすぎてえ」

首輪の発話機能ではなく、舌を動かし喋るイエルダーヴの肉声は、今までの理知的な印象とは裏腹にどこか舌足らずで幼いものだった。

「何を恥ずかしがることがある。俺は今までお前の全身を洗ってやったし……そもそも、動けるようになつたら抱いてやる約束だろう」

オウルが言うと、イエルダーヴの褐色の肌が目に見えてわかるほど真っ赤に染まった。

「そ、そんな……は、恥ずかしすぎますう！」

そして胸を掻き抱き、彼女はうづくまつてしまふ。

今まで自分の意思では動かぬ身体を、自分のものだともあまり実感できていなかったのだろう。それが動くようになった途端、人並みの羞恥が表出した。

理屈としては、わからなくもない。わからなくもないが……

散々柔肌に触れて愛撫し、昂りきつたこの欲求をどうしろというのか。

泣き喚くイエルダーヴを見下ろしながら、オウルはやはり放っておけば良かったと後悔したのであつた。

3

「あつ、んっ、あつ、いっつ、んっ、いい、よおっ、オウル、さまあつ」

濡れた肉が打ち付け合う音とともに、リズムカルに嬌声きょうせいが響く。

その声の主……マリーは尻を高々と掲げ後ろから貫かれながら、ベッドのシーツを強く挿んだ。

「もう、だめえ……っ！ イッチやう、イッチやうよおっ……！」

きゆうとその膣口がオウルの男根を締め付けて、マリーはふるふると身体を震わせる。

「ああ、イク、ぞ……っ！」

「ふあっ……~~~~~っ！」

ピタリと呼吸を合わせ、オウルが彼女の膣奥に精を放つのと同時に、マリーは絶頂に達する。どくり、どくりと断続的に白濁の液を少女の中に注ぎ込むと、張り詰めていた彼女の身体から不意に力が抜けた。

ぐったりとするマリーの膣口で、尿道に残る精の一滴までも絞り出すかのように二度、三度腰を前後させて扱しき立てた後、オウルは繋がったまま彼女の身体を回転させて、前から抱きすくめ顔を寄せる。するとマリーは嬉しそうに微笑んで、よく懐いた子犬のような仕草で唇を重ねた。

「えへへ……なんか、オウルさま、優しいですね。久しぶりだから？」

ぐりぐりと男の胸板に頭を擦り寄せるマリーの首には、既に無骨な首輪の姿はない。イエルダーヴと同様の方法で簡単に外すことができた。しかし首輪が外れてからもオウルはマリーを求め、何度も抱いていた。

それはいつもよりも心なしか丁寧で優しい寵愛で、マリーはすりすり頬を寄せてオウルに甘える。そんな彼女のふんわりとした髪を、オウルは無言で撫でつけた。

イエルダーヴに拒否された欲求の捌はけ口ぐちにしたわけではないが、それでもどこことなく後ろめたい

ものがあつたが故にかえつて丁重な扱いをしてしまったとは流石に言えない。

いずれにせよ、懸念はこれで一つ片付いた。

あとの懸念は一つ……いや。

二つ、か。

オウルはゴロゴロと喉を鳴らすマリーの頭を撫でてやりながら、そう心の内で呟いた。

* * *

それは、夕食時のことだった。

卓を囲むのはオウルにリル、ユニスにスピナ、マリーとソフィアといったいつもの面々。そこに今日はサクヤとミシヤ、ザナまでもが呼ばれていた。

呼んでもいないタツキがちやっかり食事にありついているのはいつものことだ。

「この地を、ソフィアに委譲しようと思う」

出し抜けに言い出したオウルの言葉に、ソフィアの手からぼろりとパンが転がった。

「どうということ？」

パンが地面に触れる前に搔つ搔うように受け止めながら、マリーは呆然とする我が子の代わりに

そう問う。

「そのままの意味だ。この大陸での俺の立場をソフィアに継がせる。当面の脅威は去ったようだからな」

ソフィアの力を狙う大国サハラは潰し、ヒムロとは同盟関係にある。更に東に小国はいくら存在するものの、サハラやヒムロを越えてまでヤマトへと侵攻してくるほどの力を持った国は存在しないという。ならば、もうオウルがここに残る理由は殆どなかった。

元々、オウルが新大陸にやってきたのはただの偵察にすぎない。それが色々面倒事に巻き込まれて、あれよという間にソフィアもダンジョンも随分大きくなってしまった。だがいい加減、オウルが本国を留守にするのも限界が近づいてきている。

「無理無理無理！ 無理だよお！」

我に戻ったソフィアがぶんぶんと首を振りながら、悲鳴のように叫んだ。

今の彼女の姿は十二歳程度だろうか。政を執るには幼すぎるが、それがどれほど困難なことであるか想像できる程度の分別はあった。

「案ずるな。無論今のお前に無理なのはわかっておる」

何せ一年足らずで今の姿にまで成長したのだ。成長に応じてある程度の知識や技術は備わっているようであったが、政治の勉強をする間などあったわけがない。

「補佐はつけるし、手も必要であればいくらでも貸そう。だが、この地の魔王はこれからお前だ。……お前はこの俺の娘なのだ。できるな？」

オウルの言葉にソフィアはハツとして、彼の瞳を見つめ返す。

「……うん。わかった、頑張ってみる」

「うむ。それでこそ我が娘だ」

幼い顔を精一杯に引き締める愛娘まなむすめに、魔王は満足げに頷いた。

「だからあたままで呼んだってことね。別にいーけどさ」

平素被っている猫を脱ぎ捨てて、食卓に行儀悪く頬杖をつきながらザナ。部外者である彼女までがこの場に呼ばれた理由は、要するに国単位でソフィアの補佐をせよという話だ。といっても小国であるヒムロにとつて、ソフィアと協力関係を結ぶことはそう悪い話ではない。

「旦那様……故国に、帰ってしまわれるのですか？」

悲しげに眉根を寄せてそう問うのは火山の神、サクヤだ。

「帰ると言っても、俺のダンジョンとソフィアのダンジョンはミシヤの能力によつて繋がつておる。今と大差はない。何なら、お前の部屋から直通の通路を作つても良い」

「まあ……それは、素晴らしい案ですわね」

オウルの言葉に、サクヤは両頬を手のひらで押さえて顔を赤らめる。

その様子を見ながら、あ、それ知ってる。中ボスって奴だ、とリルは思った。
ユニスとローガンをまとめて相手にできるほどの戦闘力を持つサクヤであれば、守衛としてはこの上ないだろう。

「ふむ。なれば我は主のだんじょんとやらに住まうか」

「えっ、ずるいですわ!」

ぼそりと呟く塞の神——ミシャに、サクヤが敏感に反応した。

「我は主に祀られる神故、共にあらねばならぬ」

「では妾も……」

「汝はこの山を離れられぬだろうが」

「ピシャリと言ひ込められて、サクヤはぐぬぬと歯噛みする。

「おうるのおうち、美味しいご飯ある?」

「無論だ。ここで取れる食材とは量も質も比べ物にならない」

「じゃあたつきもいく!」

ビチビチと尻尾を振りながら、タツキは楽しげに言う。神は自らの領分を離れたがらないものだが、この海の女神はどこまでも自由奔放だ。

「いずれにせよ、今すぐという話ではないし、こちらとの繋がりをつなぐわけでもない。徐々にソフ

「イアに仕事と権限を渡しつつ、委譲が済めばミシャの門を使って交流する形になる」
オウル言葉に、ソフィアはホツとして胸を撫で下ろした。いきなり全てを渡されるかと思つたが、よくよく考えてみれば慎重で過保護な父親がそんなことをするわけがない。
ちよつと住む部屋が変わるだけで、今までと変わらず見守ってくれるはず。
そう思つたからだ。

* * *

だから。

「無理無理無理無理、絶対に、無理いっ！」

「大丈夫だ。お前ならできる」

サハラの民に新たな王として演説しろ。オウルがそう言い出して、ソフィアは全力で抵抗した。
砂の王ウセルマートを討ち、その後のサハラは無政府状態となつていた。オウルとしてはてつきり他の人間がすぐに跡を継ぐものと考えていたのだが、神帝とまで名乗つていただけあつて王の権威は相当強いものだらしい。

そのまま捨て置けば、国は乱れ人々は困窮し、難民がヒムロやヤマトへ押し寄せかねない。そん

なわけです、オウルはこれを篡奪さんだつすることにした。せつかくだからソフィアを王として立てて、だ。
「そら、さつさと覚悟を決めろ」

「無理、むうーりいー！」

一流の仕立て屋に誂あつらえさせた豪華なドレスに身を包み、飾り立てられた姿でジタバタと暴れるソフィアを、オウルは即席で作った高台の上に突き出した。

あらかじ予め触れ回ったので、新たな王の姿を見に民衆は高台の前に集まってきている。その数は何百、何千、あるいは何万か。生まれて初めて見る数の人間に、迷宮生まれのソフィアは石のように固まった。

一応演説の内容は叩き込んでおいたが、この様子では満足に言葉も出せないか。最悪オウルが魔術でソフィアの口を動かし肩代わりする方法もないではないが、それは最後の手段だ。たとえしどろもどろであろうとも、この大人数の前で演説することができればそれは一つの経験になるだろうが……

「……ねえ」

思案するオウルの前で、ソフィアはふと声を上げた。

「皆、なんでそんな恰好をしているの？」

それはオウルが渡した演説の内容とはかけ離れたもの。ただの、純粋な疑問の声だった。

ソフィアの目に映るのは、砂漠の民たち。ボロボロの布を纏い、虚ろな瞳で彼女を見つめる、見窄らしい人々の姿だ。

彼らが身に着けているのは衣服と言うのもおこがましい粗末な布切れで、男たちは腰に布を巻きつけただけのもの、女も胸から下を辛うじて覆っているだけで、それすら着られずに腰だけを隠し胸は露出しているものさえ散見される。肌も露わな彼らの身体は皆、一様に酷く痩せ細っていた。

「お腹が……すいているの？」

トン、とソフィアは高台から飛び降りて、手近な民の一人へと近づく。

それは、魔王の娘としてダンジョンに生まれ育ち、裕福なものしか見てこなかった彼女にとつて衝撃的な光景であった。

ソフィアは食べるものにも着るものにも困ったことがなく——それどころか、そんな人間がいることさえ知らなかったのだ。

「食べる？」

彼女の手のひらの上に、パンが一つ現れた。彼女はダンジョンの中にあるものならなんでも自由に移動させることができる。台所から失敬してきたリルの焼き立てのパンは、ほかほかと湯気を立て香ばしい匂いを放っていた。

それを差し出された男は、ソフィアからひったくるようにパンを奪い、齧り付く。

「もう、そんなに急がなくても……」

言いかける彼女の元に、民衆が一斉に殺到した。

「えっ、ちょ、待っ……」

まるで幽鬼のように伸ばされる無数の手から、ソフィアは慌てて逃げ出す。だが、まだ幼い彼女の脚は慣れない服の重さもあつて非常に遅く、あつという間に追いつかれてしまう。

「やめなさい！」

せっかくオウルに用意してもらった美しい衣装を容赦なく引っ張られ、ソフィアが叫ぶとともに地面が隆起した。突如現れた無数の壁は幾何学的な迷路を作り出し、ソフィアと人々の間を隔てる。

「乱暴にしないの！」

その壁の上に立ち、ソフィアは声を張り上げた。その幼くあどけない容貌とは裏腹の、神業としか言いようがない奇跡の現出に人々は恐れ戸惑う。大地が何の前兆もなく水のようにその形を変え、巨大な迷宮を一瞬で作り上げたのだ。彼女がその気になれば人々をその壁で押しつぶしてしまえることは明らかだった。

「ご飯が欲しいんなら、ちゃんと並びなさい！」

腰に手を当てソフィアが宣言すると、迷宮の壁がやや低くなって互いの顔が見えるようになる。それと同時に、人々は迷宮の構造をあらかた悟った。それは迷宮とはいっても、分岐のない一本道

だ。

ぐるぐると回りながらやがてソフィアのもとへと辿り着き、そこをすぎればまた周囲をぐるぐると回りながら出口へと向かう一本道。人々はそこを歩き、王のもとを訪れ、順番にパンの施しを受けていく。

今まで強大な権力によって支配されてきた彼らにとってそれは身に馴染んだ行為であり……同時に、今までには受けることのできなかつた手厚い慈悲であった。

「……ふむ」

その光景を見つめながら、オウルは顎を撫でる。ソフィアが行おうとしているのは、自分とも、恐らくウセルマートとも全く違った治世だ。

——だが、悪くない。ふとなぞつた己の口元が笑みの形を作っていることに、オウルは気づいた。ソフィアは存外、良い王になるかも知れない。

そう思いながら、オウルは念話を通じて己おのが使い魔にパン粥を大量に作るよう伝えた。数はざつと五千といったところか。パンそのものより粥にする分手間にかかるが、飢えた身体にはその方がいい。

リルの怒号混じりの悲鳴が聞こえてくると同時に、オウルは念話を切った。



「さっさと起きろ」

ぱしやりと冷たい水を浴びせられ、横柄な口調で声をかけられて、不遜の極みに激昂しつつウセルマートは意識を覚醒させた。

そこは白く輝く石で作られた彼のピラミッドとは似ても似つかない、薄暗く陰気なレンガ造りの部屋であった。そして目の前には、仏頂面を貼り付けた琥珀色の髪の男。

魔王、オウル。

『貴様！』

その顔を見た瞬間ぼんやりとしていた思考を覚醒させて、ウセルマートは叫んだ。

だがどうしたことか、放たれた声はいつもの彼の美声ではなく作り物めいた不愉快な響きを含んでいて、身体は指一本として動かない。拘束されているのではなく、まるで動かし方を忘れてしまったかのようにだった。

「服従の首輪、と言ったか。醜悪な魔導具ではあるが、確かに便利だな」

オウルの言葉に、ウセルマートは自分の首に首輪が付けられていることを悟った。自身で装着したことなどないが、確かに意識だけがあつて身じろぎ一つできないのは服従の首輪を嵌められた人

間の特徴だ。

それと同時に、彼は己の最後を思い出す。

『……何故余は、生きている？』

氷の女王……ザナに胸を貫かれ、ウセルマートは死んだはずだった。王である彼に医学の心得などあるわけもないが、あの傷で助かるはずもないことくらいはわかる。

「蘇生した。聞きたいことがあったのでな」

『は？』

軽く言うオウルに、ウセルマートは思わず間の抜けた声を上げた。蘇生。今、蘇生と言ったのか、この男は。

『き……貴様、こともあろうに、この余を……屍兵しかばねいに仕立てたというのかッ！』

腐敗を防ぐために臓腑を抜き、乾燥させた死骸に布を巻いて魂を閉じ込めた屍兵は、首輪付きの奴隷にすら劣る卑しい立場だ。屈辱という言葉では表せないほどの屈辱、激昂という言葉では足りぬほどの激昂が、ウセルマートを襲った。

「屍兵？ あの特徴なりピングデッドのことか？ わざわざそんな手間を取るか。ただ傷を治し魂を戻して復活させただけだ」

だが続くオウルの説明に、ウセルマートは言葉を失う。

『そのようなことが……できる、はずがない。余は……余の心の臓は、完全に破壊されていたはずだ』

心は、魂は、胸の内。心臓に宿るものであるはずだ。そこを貫かれて、生きていられるわけがない。心も失っても生きているとするならば……自分とは、今感じているものとは、何であるのか？

「だから何だ？ 心臓なんてただの血液を循環させる唧筒ポンプにすぎん。そもそも蘇生なんぞ、魂が失われなければ灰からだってできる」

『灰から……だと……!! 馬鹿を言うな！ そのようなこと、できるものか!』

皮も肉も骨すらも失われた状態からの蘇生……それも、不死者としてではなく生者としての蘇りなど、神の御業ですらできぬ所業だ。

「ならば今のお前は何だというのだ」

ありえるはずのないそれはしかし、ウセルマートの存在自体が証明していた。屍兵となったものは生前の知識や経験は備えてはいるものの、こんな風に考えたり喋ったりするほどの自我など備えていない。

それは仮に比類なき王たる精神の賜物たまものだとしても、視界に映る肌の色艶は元々と全く変わっていない。死から蘇ったというのは、事実であるようだった。

「貴様らの技術レベルに興味などない。お前に聞きたいのはただ一つだ」

信じがたい出来事に呆然とするウセルマートに、オウルは吐き捨てるように言った。

「ホスセリは、どこだ」

「誰だ、それは」

「お前がウプウアウトなどと呼んでいた、狼の娘だ」

「……ああ」

狼神ウプウアウト。正確には、その呪いを受けた娘。ホスセリという名を聞いたこともあった気はしたが、そんなものはすっかり忘れていた。

「知らぬ。余はDカップ以下の女に興味はない」

きつぱりと言い捨てるウセルマートに、オウルは思わず啞然とする。

魂から漏れ出た言葉である以上、それは虚飾なき真実の言葉であるからだ。

「……愚かな。それでも、一国の王か？」

「では聞こう。異境の魔王よ」

ウセルマートの身体はピクリとも動かせず、魔術で作り出されたその声色に覇気が乗ることはない。だがしかし、そこに何か重圧のような物を感じて、オウルは居住まいを正し――

「女の乳房以上に重要なものなど、この世にあるか」

そして予想を遥かに上回る……いや、下回る言葉に深く嘆息した。

「下らんことを……」

わざわざ服従の首輪を複製し、蘇生までしてやったというのに、とんだ無駄足だった。これ以上は口を聞く価値もない。再び物言わぬ屍に戻してやるうとオウルが指を鳴らそうとした、その瞬間。

『あれほどの女を侍^{はべ}らせておきながら、あの胸を下らんと言うか。貴様、それでも男か？』
ウセルマートの言葉に、ピタリとオウルの動きが止まった。

「勘違いするな。俺が下らんと言ったのは貴様の方だ」

『そうだろうとも。特に羽と角を持つ黒髪の女。あの大きさ、あの形、至高の乳房と言っている』
吐き捨てるオウルに気を害した様子もなく、ウセルマートは熱のこもった口調で語る。

「愚かな。女の良さは胸の大きさと決まるものではない。小さいからとて無価値と断ずるは浅慮にも程がある」

『では貴様は、豊かな乳房を見た時その大きさに心躍らぬというのか！』

言い放つウセルマートに、オウルは内心呻^{うな}く。彼の言葉はあまりに偏っていたが、厄介なことにある種の真理を含んでもいた。

『余を殺すか。それもまた良かるう。だがそれは余の言い分を認め、反論できぬという証左に他ならぬ。異境の魔王よ。敗北を認めるといふのなら、この心の臓を貫くが良し！』

高笑いとともに、ウセルマートはそう宣言する。

なるほど、とオウルは心の中で呟いた。

戯言ではある。だが、看過できるものでもなかった。

王というのは面子を気にするものだ。下らない妄言といえどそれが敗北を意味するのならば、おいそれと屈するわけにはいかない。

かといつて、ウセルマートはオウルが万の言葉を弄しようと納得し負けと認めることはないだろう。

「そうか、では死ね」

しかしオウルは気にすることなく指を鳴らした。己と性癖の違うものと語ることの愚かしさなど、どこぞの幼児性愛悪魔で嫌というほど味わっている。

何より彼は生まれつきの王ではなく、面子よりも実利を重んじる叩き上げの魔王であった。

『待て待て待て待て！ やめろ！ 余を誰と心得……貴様、ただで済むと思っているのか！』

壁の表面から無数の槍が剣山のように生え並び、轟音を立てながらウセルマートを串刺しにせんとゆつくりと迫る。見苦しく喚く男の声を聞き流しながら、オウルは彼に背を向けその場を後にしようとし……ふと、その足を止めた。それと同時に、壁の動きも止まる。

『ふ……フハハハッ！ それで良い、それで良いぞ！』

「そういうえば貴様……何故マリーを。あの金の髪の娘を欲した？」

あくまで居丈高に笑うウセルマートに、オウルは問うた。この尊大な砂の王がかつて要求してきたのは、リル、サクヤ、そしてマリーの身柄だった。

迷宮の中でも屈指のバストサイズを持つ前者二名を指定した理由は明らかだ。しかしマリーにだけは違和感が残る。

仮にこれから成長する余地が残されているとしても、ウセルマートの全知が未来を見ることができないというのは彼本人が言ったことだ。仮にそれが偽りだったとするなら、砂の王は今こんな姿を晒してはいないだろう。

「……アレが、余のモノだからだ」

ウセルマートはポツリと、呟くようにそう答えた。

「どういうことだ。何故マリーがお前のものだということになる」

オウルの言葉に呼応するかのように壁が動き、尖った先端がウセルマートの額を貫いて血が流れる。だがそのまま棘とげが肉を割り、頭蓋にめり込んでも、ウセルマートは答えようとはしない。

「死ぬぞ」

忠告にも返ってくる言葉はなく。

——そのまま、肉と骨とが潰れる音だけが、ぐちゃりと鳴った。

「……ふん」

オウルは鼻を鳴らし、先程までウセルマートであった肉塊を見下ろす。

あれほど見苦しく生を乞い願った男が、いかなる理由で口を閉ざしたのか、それはわからない。

だが、彼自身が死んだ以上、気にする必要はないだろう。死者は何も成すことができない。ウセルマートがその内心に何を秘めていたとしても、こうしてその生命が失われた以上、全ては無意味だ。

そのはずで、あるのに。

オウルの胸中にへばりついた漠然とした不安は、まるで膠にかわのように拭うことができなかった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>